

# 中島千波先生(美術学部・デザイン)が 学生にすすめたい本

私にとって江戸時代と共に昔の日本とは一体どのような暮しや、喋り口調だったのだろうか、生活形態や思考形態とはどのようなだったかが興味があったり、疑問だったりした。私自身の仕事の中で、時代小説等の挿絵の仕事などには、時代考証を調査研究しなければならないケースが多々あるのである。間違った物を描いたり、場違いの衣装や場面設定は許されない事なのである。その為、図書館や書店に行っては何か役に立つ資料は無いかと年中探し求めている。そこで見つけたのが、「大江戸ものしり図鑑」(監修: 花咲一男 主婦と生活社)である。図鑑と銘打っている以上図版が中心、それも特にしっかりした浮世絵版画が載っているので判りやすく、当時の形が良く理解出来る。大江戸八百八町の隅々の事柄が満載である。

第一部は“町と名所”、第二部は“社会と住民”、第三部は“住居と生活”、第四部は“慣習と人生”、第五部は“文化と趣味”、第六部は“芸能と娯楽”、第七部は“変貌”と言った七部構成となっていて、なかなかの厚みとなっている。

平和な社会、そして鎖国という閉された世界の中で、日本独自の形態を作り出し、日本人の美意識は最高潮に達していた様に思えてならない。士農工商という身分制度の中で庶民は澁刺と生活し、現代の我々が考えている以上にエンジョイしていた姿が見てとれるのである。元禄時代以降の江戸に住んでいた数は、百万人を超えていて、世界の大都市であるロンドンやパリなどを凌駕する程の規模を持っていた事が分る。

江戸はもともと武家社会を中心にして形つくり、それに商人がくっついてきた都市と言える。その中での占有面積をみると、武家地が六十%、寺社地が廿%、町人等が廿%と言った割り振りになっている。そこから出来上がった生活文化や娯楽や道具類の多種多様な物たちは想像力に長けふくよかな世界をかもし出している。日本人のアイデンティティを探る上で、尤も分り易く目で見て楽しく読める本であると思えてここに紹介する所である。